高知大学 病院ニュース

〔 編 集 〕
高知大学病院ニュース
編　集　委　員　会
委員長　井上　啓史
〔 発行人 〕
高知大学医学部附属病院
病院長　横山　彰仁

病院長の任期を終えるにあたって

病院長
横山 彰仁

早いもので2期目の任期もこの3月で終了します。思えば色々なことがありましたが、皆様の助けをいただきながら2期4年間にわたって病院長を務めさせていただいたことは、私にとって大きな財産になりました。また、幸いにも多少は再開発に向けた環境を整えることができたのではないかと思います。これは、執印理事（研究・医療担当）をはじめ教職員の皆様のおかげであることは言うまでもありません。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。しかしながら、今後も更なる改善がなければ、まだまだ同じクラスの他大学病院に追いつくことができない、ということは申し添えておかねばなりません。

教授職にしろ、病院長職にしろ、一時的に組織を預かっているだけで、よりよい形で次に“つなぐ”ことが基本的な使命でしょう。もちろん偏狭にならず広い視野をもつことは必須条件です。若者が減少すれば大学も減らす必要があり、特に道州制となれば地方大学は減らし易くなるでしょう。医師は不足というより、むしろ偏在が問題で、医師数は2025年にはOECD平均を突破するとされています。死亡数を考慮すると、定員の半減が必要であり、そうなれば医学部を半減させるほうが効率的です。こうした状況にあるため、承知の人も多いと思いますが、大袈裟ではなく医学部や附属病院を存続させることが我々の目標であり使命となっているのです。

この目標に向かって最大限努力するには、当然のことですが、①高度医療を提供し地域から頼られ続けること、②学生や専攻医に良い学びを提供できること、③イノベーションを起こし社会に貢献できることの3点の強化が重要です。それぞれ、入院患者数・稼働率、学生の残留率・入局者数、研究費・論文数などが指標になります。これまで、病院長として稼働率の向上や、イノベーションの推進を図ってきましたが、継続してさらに充実させることが必要です。これまであまりに遠慮して、学生、専攻医の入局については他大学に比べて不十分だったと思います。情報発信や低学年の指導強化など、タスクフォースを設置して検討する必要があるかもしれません。

また昨今の働き方改革も大きな問題です。医療者も労働者であるというのは正しいと思いますが、我々は単なる労働者として医療に携わってきたわけではありません。日本の安くて高度な世界一の医療は、医療者の“プロフェッショナリズム”の上に、かろうじて成り立ってきた歴史があります。もう医療者がリーダーとして活躍した赤ひげの時代ではないのは当然ですが、下っ端根性のひとが増えて、今まさにパンドラの箱が開かれようとしているように思えます。将来、労働者となった医師は、必然的に現在の看護師と同様の交代勤務となるでしょう。それに伴って給与を下げたとしても、適法性から特に地方では病院の集約化は避けられず、国の厳格なコントロールが必要になると思えます。個人的には、今後も医療界はプロフェッショナル・オートノミーで国民を守り、単に法律にのみ従うのではなく自律的に“労働者”としての医療者を守るようにすべきだと思います（尤もそれがダメだからこうなっているとの声が聞こえてきそうですが）。

以上述べたことは皆さんにとって対岸の火事ではありません。上記の指標を高めることができない教室や組織の廃止ないし統合、また戦略的な新設を学長主導で行っていくことは必須でしょう。高知県の地域医療ビジョンでは、急性期病床が2000床余り不要となり、大学病院も安穏とはしていられず、競争的環境のなかフレキシブルに対応していく必要があります。医学部・附属病院には素晴らしい教員が多数おり、多くの優秀な学生がいるわけで、協力していけばこれまでにない新しい医学を作っていけるのではないでしょうか。学生を含めて皆に求められるのは、現状を理解して責任ある態度で物事を考えること、すなわち“当事者意識”を持つことです。不幸は自ら呼ぶものであり、医学部・附属病院の行く末が“どうなる”かを考えるのではなく、“どうする”のかを考え行動することが必須だと思います。

医学部長の任期を終えるにあたって

医学部長　本家 孝一

一昨年の就任以来、あっという間に二年間が過ぎました。教職員皆様のご協力のお陰でなんとか乗り越えて来ました。深くお礼申しあげます。本学では、病院再開発、医学部再開発、国際認証評価受審と課題が山積していますが、最大の問題は、将来の大学を背負う後継者の層が薄いことと認識しています。人がいなければ、地域も組織も成り立ちません。大学の使命は人材育成です。情けは人のためならず。我が子を育てるように、粘り強く愛情をもって育てれば、必ずや大学に残る医師の数は漸増すると思います。

人材育成の元肥は理念です。入学時や白衣授与式などの節目に、建学の精神の「敬天愛人」と「真理の探究」を復唱してきました。サイエンスとヒューマニティーを追究する高邁な理念は誇るべきものだと思います。この理念に加えて、「自立（independence）、自律（autonomy）、独創性（originality）」を備えた若者を育てなければなりません。資本主義と民主主義が行き詰まり、国際秩序が不安定化しています。2045年には人工知能がヒト脳を凌駕するとも予想されています。この不確実性の時代に生き残るには、迷走する社会の中で自分を見失わないことが肝腎です。

現代は物質文明が精神文化を圧倒しています。国の政策は文明を強くすることに注力されていますが、文化は置いてけぼりです。文化はいったい誰がケアするのでしょうか。本来、学術は精神性が高く、文化の一部であったはずですが、近年、科学技術の進歩にウエイトを置き過ぎているのではないでしょうか。大学は今一度、文化の重要性を振り返るべきだと思います。本当の知性とは何かを考えなおすことです。

大学の財政基盤が脆弱で、従来の体制を維持することが困難になりました。今後もこの状況は変わりそうにありません。このような厳しい状況下でも、将来への夢を失わないような大学の文化を築くことが、大学人に託された宿題なのだと思います。

四月の理事（研究・医療担当）就任以後も医学部の存続に努めてまいりますので、皆様のお知恵をお貸しくださいますようよろしくお願いします。

退任のご挨拶

医事課長　都築 泰仁

皆様37年間大変お世話になりました。この3月をもって定年を迎え、第2の人生を歩むことになりましたと言いたいところですが、4月からも病院に関係する業務に携われるよう要望していますので、院内で見かけたらよろしくお願いします。働き始めた時は、40才以上の方は違う人種のように思っていましたが、今、私自身が60才になりました。入職以後、2年間を除き岡豊キャンパスで勤務しましたので、この病院に私は社会人として育てられ、私の家族は養っていただいたことになります。

振り返ってみますと、思ったことの十に一つもできなかったという無力感とよく私があのポジション務まったな、あんな仕事できたなという充実感が交錯します。しかしよく考えますと、前者は私自身の能力、努力不足、後者は、回りの方々の協力、支援の賜ということで、相反するものではないことと納得しています。

さて、職場は仕事をするだけの場ではなく、仕事を介して集まった人たちが、趣味、価値観の同じ者同士が交流するきっかけとなる場でもあります。その点、私は野球、ゴルフ、釣り、飲み会と職場をフルに活用して充実したアフター5、休日を過ごさせていただきました。このことも回りの方々に感謝しています。

医療機能の分化、連携に伴う医療提供体制の再構築、安全な医療の一層の充実、医療機関職員の勤務環境改善等、病院に求めるものが、大きく変わりつつあります。しかし、今までも病院は、2年毎に変わる診療報酬、新たな臨床研修制度、特定機能病院の制度化等、環境の変化に対応してきました。大学病院が国民にとって必要なものである限り、職員同士がお互いの役割を尊重し、力を合わせれば、これを飛躍の機会とすることができるものと思っています。　皆さんの健闘を祈ります。

就任のご挨拶

神経精神科学講座
教授
數井 裕光
かずい　ひろあき

平成30年1月1日付けで、神経精神科学講座教授を拝命致しました。何卒宜しくお願い申し上げます。

私は、兵庫県神戸市の出身で、鳥取大学医学部を平成元年に卒業しました。私は、医学部学生の頃から、脳のどのような領域が、どのように働くことによって様々な精神活動が生じるのかに興味があったため、卒業後は西村健教授が主宰されていた大阪大学神経科精神科に入局しました。阪大病院での精神医学の研修と兵庫医科大学救命救急センターでの研修の後、3年目に大阪大学大学院（精神医学）に入学し、神経心理学（脳の各領域の機能、および領域間の情報の流れの知識を元に、精神症状を理解しようとする臨床分野）の研究、およびこの知識を活用した診療を開始しました。

大学院卒業後は、精神科専門病院、兵庫県立病院精神科をへて、大阪大学神経科精神科に戻り、武田雅俊前日本精神神経学会理事長、池田学現教授のご指導をいただきながら、昨年末まで15年間勤務しました。幅広い精神疾患の患者さんを診察する一方で、最も治療法の開発が遅れ、また今後増加することが明らかになっている認知症を対象として、病態解明研究、診断法・治療法の開発研究、診療ガイドラインの作成、地域住民に対する継続的な啓発・教育活動の実践などを行って参りました。また認知症患者さんの精神症状に対する声かけ法、対応法を、奏効確率とともに公開するウエブサイト「認知症ちえのわnet（http://orange.ist.osaka-u.ac.jp/）」を開発し、現在も運営しております。大阪大学の先輩、同僚、後輩、および全国の共同研究者に恵まれたおかげだと思っています。

高知大学においては、教育、診療、研究をバランスよく行い、高知大学医学部附属病院、および高知県における精神科医療の発展に貢献したいと思っています。また研究する喜びを実感してもらえるよう指導し、世界に通用する精神科スタッフを育成したいと思っています。ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

県立あき総合病院との電子カルテ相互参照に関する協定調印式を行いました

地域医療連携室

平成29年11月29日（水）高知大学医学部附属病院は高知県立あき総合病院と電子カルテ相互参照に関する協定を締結しました。

本学医学部で協定調印式が行われ、前田博教高知県立あき総合病院長と横山彰仁病院長が協定書に調印しました。

この協定は、患者さんの同意のもと、お互いの電子カルテを参照することにより医療情報を共有し、安全で質の高い医療を提供することを目的にしたものです。この協定に基づき平成30年1月4日（木）からカルテ相互参照システムが稼働しています。

本院がカルテ相互参照の協定を結ぶのは初めてで、今後更に県内他院とのカルテ相互参照を進めて地域医療に貢献していきたいと考えています。

高知労働基準監督署の指導を受け、平成30年2月6日（火）に開催しました「勤務時間管理者講習」及び「労働者説明会」のとおり、勤務時間管理者は勤務時間の適正な記録・申告のための環境づくりに努めること、労働者は勤務時間の適正な記録・申告を行うことの重要性・必要性を認識することを遵守してください。

治験貢献賞表彰

高知大学医学部附属病院では、治験に貢献された医師及び部門に病院長より表彰状の贈呈をしています。承認前の医薬品の安全性、有効性を確認する治験に貢献された医師及び部門を表彰することで、治験に対する理解とモチベーションを高めることを目的としています。

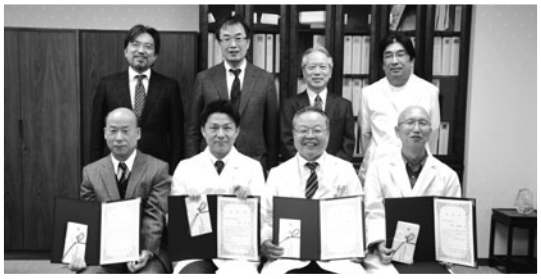
本年は、平成30年1月4日に治験貢献賞授与式を開催し、平成28年度に本院で行われた治験においてご活躍された、下記の先生方及び部門を表彰しました。

◆治験貢献賞

1位	乳腺センター	病院教授	杉本 健樹
2位（同率）	皮 膚 科	講　師	中島 英貴
	老年病・循環器内科	講　師	久保　亨

◆治験実施優秀チーム賞（実施率）　皮膚科

◆治験実施優秀チーム賞（治験実施貢献部門）　病理診断部



永年勤続表彰

永年勤続の表彰式が平成29年11月22日に朝倉キャンパスで行われました。岡豊キャンパスからは次の6名の方が表彰されました。20年間お疲れさまでした。今後ともよろしくお願いします。

◆ 放射線部　鈴木　公彦	◆ 看 護 部　小島　千尋
◆ 看 護 部　西村　有香	◆ 看 護 部　野瀬　希
◆ 看 護 部　田内　佐妃	◆ 看 護 部　西村　孝洋

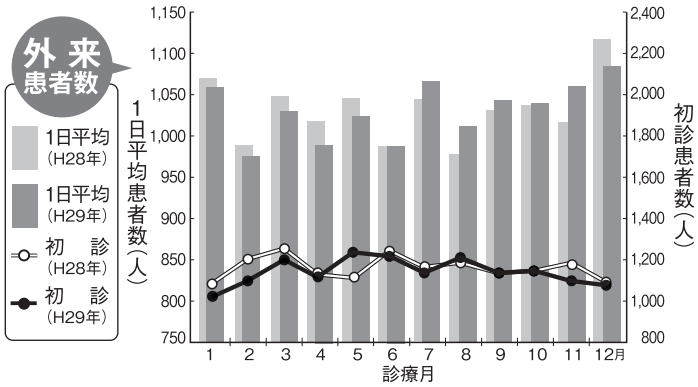
（敬称略）

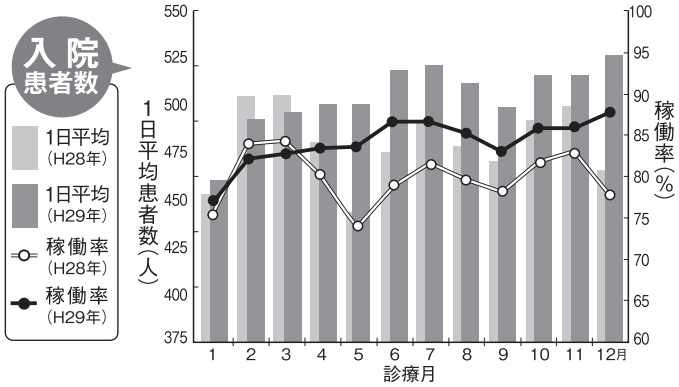
医学教育等関係業務功労者表彰

文部科学大臣は毎年、医学又は歯学に関する教育、研究もしくは患者診療等に係る業務に関し、顕著な功労のあった方を表彰しています。

平成29年度も、この表彰式が11月28日に東京で行われ、本院の受賞者である放射線部 森尾 一夫主任診療放射線技師と、検査部 森田 珠恵主任臨床検査技師の両名に、表彰状及び副賞が贈呈されました。

診 療 状 況





編集後記

今年度、病院ニュース編集委員を務めております医学情報センターの渡部です。今号が発行される時期は、役職の任期を終えられる方や新しく役職につかれる方が多くいらっしゃる時期です。病院長の任期を終えられる横山彰仁先生と医学部長の任期を終えられる本家孝一先生にご執筆をして頂きました。また医事課長の都築泰仁さんに退任のご挨拶をご執筆頂きました。長年に渡るご尽力によって今日の高知大学医学部があるのだと思います。また、新しく神経精神科学講座の教授として數井裕光先生が赴任されました。數井裕光先生に新任のご挨拶をご執筆頂きました。

私が所属しております医学情報センターに関連している話題でもありますが、県立あき総合病院と電子カルテの相互参照が始まりました。その協定締結式について医事課より記事を頂きました。このような電子カルテの相互参照が高知県内の多くの病院との間で成立すれば、地域医療への貢献にも結びつくものと思われます。引き続き最新の情報をお届けしたいと思います。

（文責：渡部 輝明）